

有田川町の地域創生

～我がマチ自慢が出来る人々を増やしたい～



三角治氏

株式会社 地域創生 社長 三角 治
一般社団法人 絵本まちづくり協会 理事長

まちづくり会社 「株式会社地域創生」

有田川町の役場を退職されて、様々な地域づくりの活動をされておられる三角治氏を10月11日に訪ねました。三角氏が運営している有田川町のサードカフェでインタビューさせていただきました。（文責 事務局 西岡）

西岡：今まちづく活動で活躍されていますが、どんな事がきっかけですか。
三角：退職後は民間の立場で、今までできなかったことをできれば面白いと思っていました。退職前に増田レポートが出て、地方創生が言われ出しました。まちづくりに踏み出したのは、そういうことがきっかけでした。地域を新しくつくり出すと「地域創生」という株式会社を平成26年4月につ

くりました。
西岡：株式会社にした理由は。
三角：NPOとかであれば、ボランティア的な感じがするでしょう。

そうではなくて、地方創生で言われている民間活力、要するに営利団体のほうが、よりシンボルチックになると思いました。ただ、定款では、非営利とか株式配当はないとか、収益時、教育福祉に配当するとしています。ボランティアはかっこいいけれど、それなりのペイがないと、人は動かない。NPOより株式会社の方が、やりがいもある。
西岡：行政からの出資はないのですか。
三角：全くないです。でも、現実問題、まちづくり会社は儲かることは少ないです。
西岡：社員は何人いるのですか。
三角：社員はあつてないよ

うなものですからね。スタッフもおりますが数名です。
西岡：定年退職してすぐ始められたのですか
三角：絵本まちづくり協会もいっしょにやっています

が、この協会は退職後すぐに設立しました。事前準備さえキチンとしておけば1日で社団法人を登記できるんです。
西岡：再任用とかは考えなかったのですか。
三角：全く考えなかったです。教育部長で辞めたのですが、再任用では指示を受ける立場になる。まちづくりをしていくのであれば、再任用ではできないと考えたんです。
西岡：在職中に、こういうことをやりたいというイメージができていたのですか。
三角：増田レポートの後、地方創生という補助金があったのですが、株式会社「地域創生」では、初年度に有田川町における六次産業のブランドデザインを町の委託を受けて取り組みました。私は、やるべき方向とか、こういうふうになれば

目次

- 有田川町の地域創生
～我がマチ自慢が出来る人々を増やしたい～
株式会社地域創生 社長 三角 治 …… 1
一般社団法人 絵本まちづくり協会 理事長
保育にかかわる人たちの声を聞いて（前編）
一切実な保活経験者の声と保育関係者の声—
新日本婦人の会和歌山県本部 満留 澄子 …… 5
「限界」集落からの挑戦 —古座川町七川地区の事例—
和歌山大学食農総合研究所客員教授 湯崎真梨子 …… 7

わかやま住民と自治

発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9 太田ビル203号
TEL・FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp 2018年12月号



サードカフェの店内

町の活性化が図れるという思いをデザインさせていたできました。

株式会社「地域創生」をつくるきっかけは、退職前にまちづくりのモデルとして、アメリカのポートランドの取り組みを知ったことです。ポートランドは、以前は町が衰退して治安も悪い状況だったといえます。

それを立て直そうと地域リノベーションしながら、今では全米一住みたい町になったということです。そのプログラムが有田川町でも参考になるのではないかといいことで、退職後すぐに町長に会いに行つて、ポートランドを手本としたまちづくりを仲間の方々と共に提案させていただきました。

西岡：視察の報告書をネットで見ましたが、三角さんから町に視察を提案されたのですか。

三角：提案する以上、実態も知らないといふので、4月に提案させてもらつて8月に視察に行きました。視察は6人で、僕は自費で行きました。また向こうからも来てくれて、その方々と有田川町の未来について考えるシンポジウムもやりました。

一般社団法人 「絵本まちづくり協会」

西岡：地域創生の事業と絵本によるまちづくりとは、どんな関係になるのですか。

三角：株式会社「地域創生」

は全体を包括し、絵本に特化したのが絵本まちづくり協会ということになります。

僕は以前教育委員会で、図書館改革をやってきました。図書館でできるまちづくりとか人づくり、子育て支援があると思っていました。絵本でまちづくりをしているところは、北海道釧路市と富山県射水市くらいで、町全体でやっているところはほとんどない。子どもが楽しく過ごせて、すぐ育てるような町になることは、町の活性化につながっていくし、ここに住みたい人も増えるということだと思います。退職後、民間という立場で、絵本によるまちづくりをやれば面白いと思います。

西岡：この絵本カフェも取り組みの一つですか。

三角：カフェは、子どもがやかましいとかで子連れで行きにくい所になっています。絵本があつて、子どもと一緒にゆつくりできる一つのモデルとして、サードカフェを開きました。

西岡：ほかに、絵本まちづ



町内におかれている『まちかど絵本箱』

くり協会としてやっていることは。

三角：町に絵本まちづくりのブランドデザインを提案させてもらいました。この箱もその一つですが、ここに絵本を入れて、お店に貸し出しているんです。まちかど絵本箱と言って喫茶店や美容室、病院などに置いています。例えば、美容室へ行くと、そこに絵本があり、待ち時間に絵本を見ます。絵本を借りることもできます。絵本を借りた客は返しにくるから、また足を運んでくれて店にもメリットがある。絵本箱は3年前から初めて、今、30か所に置いてあります。行く先々に絵本があるという町にしてい

貴重な民間からの まちづくり提案

西岡：町にとって行政のことを理解した上で、民間の立場で具体的な提案をして

くのが、絵本まちづくりだと思っています。他にも「えほんマルシェ」とか「絵本ワールド」という絵本によるイベントもやっています。「えほんマルシェ」は、毎年4〜5千人規模でALECで行っています。元々は、現役の時に絵本コンクールを始めたのですが、表彰式に人も来ないので、お客を呼ぶような絵本の販売などのイベントを行ったのがはじまりです。



ALEC

くれる人がいるのは貴重ですね。

三角：僕は、町内外の有田川町に着目する人に向けて、いろいろな発信をしています。行政にはプラスになっていると思っています。

絵本によるまちづくりの

ランドデザインでは、これをするといい、こうなるという具体的な活動も提案しています。六次産業のランドデザインは、現状を分析した上で、これからのあるべき六次産業の姿とか、これから一次産業はどうすれば生き残れるのかというようなことを書いています。あとは行政が、民間とも手を組んでやっていくことが大事だと思います。

地域交流センター

「ALEC」

西岡：ALECの話聞かせてください。

三角：旧吉備町には図書室はありましたが図書館がなかったので図書館をつくりたいと思い、全国の有名で人気のある図書館を調べました。分析してみると、図書館を利用している人は、精々10%から20%でした。何億、何十億円もかけて図書館をつくり、維持費に何億円も使うというのは少し違う。図書館はもっと普通

に使える場所にしないといけないと思っていました。

平成17年頃、合併前の旧吉備町がまちづくり交付金事業で、町の縦軸横軸に道をつけ、その真ん中に交流施設をつくることになり、その建設を担当してほしいという話があり、図書館をつくろうと担当しました。国の担当からは、地域交流施設は住民の交流目的のものだから図書館は駄目だと言われました。人々が集まるような図書館をつくりたいと思っていたので、交流センターという名前の図書館づくりを始めたというのがスタートです。

図書館という静かでないところだとか、本好きな人だけが集まるとイメージがあります。そこで図書館のタブーを破ろうと思いはじめた。まず図書館で行ってはいけない飲食や話もできるようにしよう。普通は、図書館に入ると、司書の方が座っていて、本箱が並んでいるのですが、ALECは、入るとアプローチが長く続き、今はないですが当

初はクラシックカーやバイクが並んでいました。本ではないものにも興味を持って、多くの人に来てもらいたくて、いろいろな展示が面白いと考えたからです。

また、静かにしなくてもよいということが分かるようにBGMで音楽を流して、そこで話ができるようにし、コーヒーも飲めるようにしました。

それは内部でも論議がありました。本が汚れるから図書館でコーヒーとか飲ましたらあかんという意見もありました。でも、家で読むとき、お茶を飲みながらカレーを食べながら本を読んでいるかもしれない。家で読む状況を考え、飲食ができるシステムにしました。そうすれば、カフェ目的で来る方もいる。例えば、どこかへ旅行に行きたいと友達が集まってコーヒーを飲みながら旅行の話をして、図書館にあるガイドブックやいろいろな資料を使う。図書館の使い方が広がります。限られた人のための施設ではなくて、もっとオー

ブンに使ってもらう施設です。公共図書館というようなものでも飲食ができるというのは全国でALECが初めてです。

西岡：最近、全国的にも図書館運営を民間委託するというのが話題になっていますが。

三角：それは、武雄市が一番先に始めた。ALECは平成21年4月26日に開館しました。武雄市はそれから2年か3年遅れて、本屋さんと一緒に始めたわけですが。僕も武雄市の図書館を見に行きました。図書館に人は来ていますが、あの施設は私の考える図書館の理想型とは違います。民間委託は否定しませんが、公共図書館はもっともつと自らの力で本来の図書館サービスを展開しなければいけないと思っています。公共の立場でも出来ることは大いにあります。その市町村の持つ地域性と個性を十分に反映しつつ、住民ニーズを的確に把握し、アイデアを出し、知や文化の拠点となる図書館作りをする



あらぎ島の近くにオープンした笠松亭

ことが大事じゃないかと思
います。安易に民間委託で
はなく、住民に寄り添った
サービス展開を公の立場で
行うことが使命だと考えま
す。地域交流センターAL
ECとは、Aridagawacho
Lifelong Education Center
の略です。生涯学習の場
になってほしいという意味で、
決して図書館だけの機能じ

やない。当然商売でもない。
住民が気軽に集まれる場所。
ひと言でいえば、誰もが気
軽に利用できる図書館をつ
くりたかったというのがAL
ECです。

目指している 有田川町の未来

西岡：三角さんが目指して
いる有田川町の未来につい
てどう考えていますか。

三角：ひと言で言えば、『我
がマチ自慢が出来る人々を
増やしたい』ということだ
す。自分の住んでいる町を
誇れるってまちづくりの基
本中の基本ですから。

東大のあるゼミで先生が
学生に聞いて、君の出身地
のいいところを3つ挙げて
ごらんと言うと、なかなか
出てこない。ふるさとの本
当の魅力を知らない学生が
多い。特に東大などに行く
人は、小学校の頃から塾へ
行き、居住地から遠い私学
に行つて、一番多感な時代
を私学のまちで過ごすわけ
で、居住地の子どもたちと
も遊んでいない。だから地
域の事が分からなくなる。

自分の住んでいる町を誇れ
るようにならないと、町の
活性化はできない。もっと
住み良い町にしたいという
意識も生まれてこないと思
うのです。取りあえず、お
らが町はええ町やと大きな
顔をして言えるように、し
かも、ここがいい、あそこ
がいいと言えるような町に
なればいいと思っています。

西岡：最近、大学などで都
会へ行くと出身地に帰つて
こないという話をよく聞
きますが。

三角：和歌山県は、大学や
専門学校への進学で、18歳
で県を出る率が日本で一番
です。理由はいろいろあり
ますが、やる気のある子が
出ていってしまうのです。

小さい時分から、この町が
好きとか、ここがいいって
思っていたら、大学へ行つ
て他府県に行ったとしても、
いろいろ見聞きたことを、
ふるさとへフィードバック
したいとか、こうして盛り
上げたいとか、働く場所が
なくても自分で起業する
とか。そのためには、小さ
な時からこの町がいいと思

てもらえるようなまちづく
りをしないといけない。絵
本まちづくりもそういうこ
とを目指しています。ふる
さとを愛する心とか、自慢
できる場所づくりというの
は、これから一番必要だと
思います。

行政は、企業誘致をして
働く場所づくりをしてきま
したが、今はもうそんな時
代ではないと思っています。
今、日本は10人に1人が東
京に住んでいて、地方が切
り捨てられているけれど、
ビジネスチャンスはいっぱ
いある。それを生かすよう
な働きかけをするのがうち
の役割と思っています。

今、有田川町の廃園にな
った旧田殿保育所を管理さ
せていただいて、起業する
人たちを募集したり、シェ
アオフィスで、新しく起業
する取り組みも、地域創生
としてやっています。また、
田舎の原風景、ほかにはな
い魅力がある清水で、築
150年の古民家をリノ
ベーションして8月から宿
泊施設「笠松亭」を始めま
した。一棟貸しで、まず来

てもらって、魅力を探つて
もらおうというところから
始めました。有田川町は吉
備・金屋・清水それぞれの
良いところ、違った持ち味
があるので、それをきちんと
発信していければまちづ
くりができると思っていま
す。

ただ、それが実現できる
かどうかというのは、資金
力の問題や、一番大きい
のは人材の問題です。予算と
人材というのは、大変厳し
いところですね。その点、
行政のできることがたくさ
んある。そういう頑張りを
行政ができれば、もっと良
くなると思います。

今まで全国の中で最下位
とも言われていた島根県、
鳥取県、佐賀県などは、ま
ちづくりがすごく盛んにな
っています。危機感がすご
く強く、まちづくりの取り
組みに必死なように思いま
す。少しでも地域がまちづ
くりを考えていかないと難
しい状況にあると思います。
西岡：本日は、貴重なお話
を聞かせていただき、あり
がとうございました。

保育にかかわる人たちの声を聞いて(前編)

—切実な保活経験者の声と保育関係者の声—



満留澄子氏

新日本婦人の会和歌山県本部 満留 澄子

今回は、2018年10月7日に和歌山市で開催された第8回わかやま住民要求研究会の第1分科会で報告された和歌山市での保育に関する取り組みについて、新日本婦人の会和歌山県本部の満留澄子さんに寄稿していただきました。なお、この報告は2回の連載になります。

私は、和歌山市に住んでいます。小6、小4、3歳の保育園児の子どもがいます。

長男が年長の頃から保育運動をしてきましたが、「子ども子育て支援新制度」によって、和歌山市でも官から民への動きが現われ、34の公立園を16のこども園に集約する動きを肌で感じてきました。

保活経験者の声

3年前娘が生まれた年、待機児童が全国的に問題になり「保育園おちた。日本死ね」のFBをキツカケに親御さんの想いは爆発。和

歌山市でも昨年2月の時点で、保育所の決定通知が来ていない子どもさんが100人も200人もいるという話を聞きました。都市部だけの問題だと思っていたらこの和歌山市でも起きているんだと驚き、今立ち上がらないといけない「保育園!!! 私たち声を上げます!」というイベントを企画しました。当日は弁護士さんを招いて「不服審査請求の書き方講座」を計画しましたが1人だけの参加でした。今年は、平日と土曜の2回開催し、市議員さん、保健師さん、弁護士さんを招いて保活経験者と交流し、様々な声を聞くことが出来ました。

保育関係者の声

参加者からは、「入れたければ第5希望まで書いておいてと言われた。」「育休

制度が1年あるのに、1歳での途中入所は難しく、0歳のうちに入園しないといけない。」といった保活の大変さだけでなく、「子ども園に見学に行ったが大規模で、先生が子ども達全員を把握することは無理があるように感じた。」「市が発信する保活の情報が少ない。」「就学前の子どもたちの育ちは大切なものの、保育が軽んじられているように感じる現実がとても悲しい。」と言った声もありました。

事前アンケートの方には「保育が好き、子どもが好き、でも過酷な労働のわりに処遇が低く、続けられない。」という保育士さんからのリアルな声も。子育て日本一を掲げる尾花市長は、待機児童をゼロにするよう担当課に命じるそうですが、それを受けて担当課は民間保育園に定員を広げるよう働きかけ、民間保育園は加配が必要になる障害児や、グレーゾーンと呼ばれる発達障害の疑いがある子どもを受け入れたがらなくなり、

行き場がなくなった子どもたちは、公立保育園にいきます。行政が公立保育園の充足率の低さを理由に民営化していきますが、早朝保育や延長保育などのサービスを、民間保育園に合わせ向上することを怠ってきたことが保護者のニーズに合わない大きな原因だと思います。障害児を受け入れる施設はこじか園、あおい学園などありますが、こちらも定員がいつぱいで、抽選にはずれると普通園に通うしかなくなります。保育時間だけを見ても、どちらもフルタイムで働く親御さんにとっては利用しづらく、



3月28日「保育園!!! 私たち声を上げます!」

『保育園!!! 私たち声を上げます! 2018』

「4月から仕事なのに、保育園まだ決まっていなくて…」
「決まっただけ希望する園はアカンだった。」
「保留って…。職場復帰は保留でせやん!」
「上の子と下の子で別々の保育園になっても大変!」
「まだ預けたくないけど途中入所は難しいって聞いたから保活した。」



今年もすでにこんな声が聞こえてきています。全国的に問題となっている保育園不足がこの和歌山市でも。東京では、「なによりも子どもを大切にできる保育園を」記者会見&ミーティング(2/22)が行われ、「保育所ふやして!」「よりよい保育を!」と、当事者であるお父さん、お母さん、保育士さんたちが国会に声を届けています。

昨年私たちは、弁護士さんを招いて「不服審査請求(困っているのにどうしてダメなの?と尋ねる為の書類)の書き方講座」を開きました。今年は、保育所入所に関する皆さんの疑問、悩み、本音を聞ける場をつくり、弁護士、保健師、保育士、市議員の皆さんにも直接アドバイスをもらったり、交流に参加してもらえるようはたらきかけているところです。

是非とも多くの当事者(保活経験者、一緒に悩めるおばあちゃんも)に知っていただきたい企画だと考えていますので、SNSでの拡散、お知り合いに当たっていただくなど、広く呼びかけをお願いします!

日時: 2018年3月17日(土)、28日(水)
9:30open 11:30close
場所: 勤労者総合センター 3F和室1 (和歌山市西汀町34)
主催: 新日本婦人の会和歌山県本部 TEL/FAX 073-424-5803
(新日本婦人の会は国連に認証されたNGOです)

保育サポーター
もいるのでお子
さんどうぞ☆

「保育園!!! 私たち声を上げます! 2018」呼びかけチラシ

「保育園!!! 私たち声を上げます! 2018」で交流されたおしゃべりの中から

開催日 2018.3.17と28の2回
主催 新日本婦人の会和歌山県本部

「秋生まれは4月の入園を待つことが当然」という保育所探しの常識を全く知らなかった。

上の子の同級生のママ、下の子生まれて(1歳)上の子が通った園にまた入りたくて4月入所で申請したけどダメだった。自営業だからなあ。もう1年待って、ここ数年で保育や育児の環境が悪化して、社会のゆとりがなくなっているということでしょうか。

小学校はみんな入れるのにその前は競争?という違和感がある。

子ども園は働いても辞めても園を変わなくていいと進められたはず。なのにそれが機能していない。アンケートをとってみたい。

準備費用が公立では5000円、私立では2~3万円。こども園の幼稚園部に行ったらどうなるのか。ぐるんとかに行けば情報交換もできるけど、情報量がたりない。他府県から引っ越してきた友達、今は夫の給料だけでやっているけど来年には働きたいと言っていた。情報量が少なくてとても困っていた。

仕事に就けない、結婚できない、出産なんて無理。そういう状況の人をいかに支えている社会。見えにくいことになっている社会は不健全。

今の保育制度は、子育てしている人にとって使いづらいシステムになっていると思います。

ある保育園に見学に行ったら、「うちにはペン習字も音楽も英語もやっています。幼稚園に負けません」ってすごくアピールされた。それにかかる費用の問題もあるし、「うちの子にそれを受けさせませんと言った場合どうしますか」と聞くと、「別室で受けない子だけ保育をします」と。ここで格差を感じないといけないのはダメだと思ふ。

市立から子ども園になって、急に制作の時間のこののぼりの材料費まで集金されることになったところがある。お金があれば1人だけこののぼりなしに。

子どもが小さい頃、看護師をしていました。夜勤があるので民間保育園と院内保育所で二重保育でした。第一希望落ちた時点で待機児童だと思ふ。

ダンスや英語など習えます。園の外で2こ以上習い事させないといけないという園があると聞いた。

子どもを預かってもらえたいや。なんて本気で思っている親はいないと思う。

市は公立の保育園を減らすだけで対策をとっていないように思う。

大規模園より、先生も他のクラスの子も名前がわかるような園を希望している。



市政がもっと子育てに力と予算をまわして子どもの目線に立ったものになってほしいです。

今後、第二子も保育料無料を検討していると思うし、預けたい親がふえる→受け皿が足りない→保育士も足りない、とならないよう、保育士の処遇改善なども一体に進めていってほしいと思う。

兄弟別々だと、送迎も大変だけど、運動会や発表会が重なったらどちらかに我慢をさせたり午前と午後分けてバタバタしたりしないといけない。

生活のかたちが変わることを想定して、使える制度になつたと思います。みんなが産める、産みたくる社会になつたらいいと思います。



子どもを母親が1人でずっと見るのは不可能だと思う。子どもにとっても保育園に入れるのが幸せだと思う。だからこそ保育の質を高めてほしい。

以前フランス人のお父さんが、「フランスでは保育料なし、おむつ、エプロン、コップを持って行くのすら日本はおかしい」と言っていたのが衝撃的だった。フランスでは出生率増えている。

紀の川市の保育園は空きがあるよ。市の負担で民間幼稚園も第3子無料。償還払いで年度末に返金。償還払いでなければ何も支給はない。

第2子の育児中です。小学校教諭です。育児の延長を1度したのですが上の子と違う園に入れるのは無理があるので、もし入園できなければ更に延長をしたい旨学校に伝えたと、延長は1度しかできない。兄弟別になっても入れる園があるなら戻ってきて」と言われた。産休に入る前にきちんと説明してほしい。

見学に行ったマンモス園。シャツを着ている子もいるが、オムツ1枚で保育しているの?『なんですか?』と聞くと『ズボンのお洗濯増えるとお母さん大変じゃないですか?』と。1.2歳の子を見ている若い先生が腕を組んで立って子どもたちが遊んでるのを眺めているだけという様子を目にして候補から外した。

仕事上小さい子をもつお母さんとお出会うが、仕事復帰を考えているお母さんから「保育園に入れるか?」「0、1歳児で入所したい」となど相談を受けることが増えた。

上の子が保育園に入っているも、働かず1歳半過ぎると出ないといけないらしく、1歳で復帰の人が多い。育児制度は3年あるのに、保育園に入っていられないから1年や1年半で復帰せざるを得ず、制度があるのに便利になっていなくて困っている人が多い。

質の良い保育園をもっと増やしてほしい。

人気のある園でない園があることが市役所でわかると思う。「あなたの園はこうしたらもっと良くなると思いますよ」と助言したい。

保育所の数が足りない。保育士の環境問題。社会全体で取り組まない(考えていない)といけない。と思う。

母子手帳交付のときにどれくらい保育の枠を確保しないといけないか市役所でわかるはず。対策をとってほしい。

女性の働き方として、フルタイムとパートがあるが、女性の地位向上を考えると、自分はフルで働きたい。3人の子どもの全員が小学校に入ったらフルタイムで働きたい。

今長男は学童だけど、それもなく思っていない。よい環境をどこでも作ってほしい。

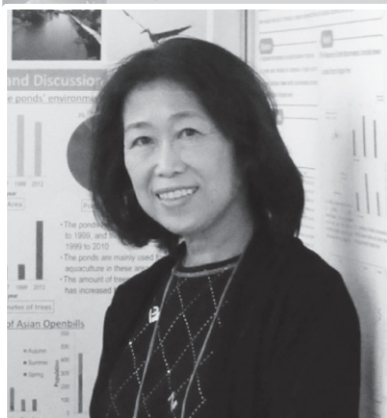
「保育園!!! 私たち声を上げます! 2018」で出された意見

「限界」集落からの挑戦

—古座川町七川地区の事例—

和歌山大学食農総合研究所客員教授

湯崎 真梨子



湯崎真梨子氏

これは2018年10月7日に和歌山市で開催された第8回わかやま住民要求研究会の第4分科会で報告されたものをまとめて寄稿していただきました。
報告者の湯崎氏は、元和歌山大学教授で、専門は農村社会学、地域再生学です。また自らの研究に加え、地域と協働するプロジェクト研究をマネジメントされています。

高齢化と限界集落

農山村地域などの過疎高齢化の進行がとまらない。我が国でこの課題が広く一般に認識されたのは「限界集落」という言葉の登場による。「限界集落」とは、過疎化などで人口の50%以上が65歳以上の高齢者になり、冠婚葬祭や寺社、水路の管理など社会的共同生活の維持が困難になりつつある集落を指す。1991年

に社会学者が示した概念で、老人夫婦世帯や独居老人世帯で構成され、担い手はいなく、やがて人口が0になり「消滅集落」に至るといふものである。

日本の高齢化率は27・7%（2017年10月現在）、和歌山県は31・5%（2018年1月現在）。そして、和歌山県の最高齢化率自治体は古座川町の52・0%、本項が対象とする古座川町七川（しちかわ）地区は特に高齢化が著しい地区である。

七川（しちかわ）は、古座川上流域とその支流、添野川、平井川、成川流域に位置する松根、西川、成川、下露、平井、添野川、佐田の7地区を指す。

この七川が立地するエリアを古くは七川谷郷といい、北西の端は大塔山系に至

り、最奥の地区は松根だが、これより先は「人跡も絶えて知る人もない」と紀伊続風土記は書いている。古座川で有名なニホンミツバチの蜂蜜は、特に松根の蜂蜜が上質とされ江戸時代には「熊野蜜」として全国に名だたるブランドだった。

七川は林産物や養

蚕、林業、製炭などで熊野の産業の一翼を担い、大正時代には人口が3500人を超えていた。しかし、現在の人口は、7地区合計で446人（2015年）、高齢化率が71・5%。しかも人口の2割近くが85才以上でその多くは独り暮らしという超高齢、超過疎である。この先は人口の自然減少しかなく、先の概念に従えば、集落が消滅するのは時間の問題ということになる。

しかし、そうであろうか。限界から消滅へのシナリオを止めるために、限界集落が取り組みはじめた挑戦に



聞き取り調査

ついて七川地区を事例に報告したい。

サクラと希望

2018年11月、「七川地域の活性化と、地区住民が生きがいを持って明るく健康的な生活を送る環境を創り、次の世代に持続可能な地域を継承する」ことを目的に七川地区ふるさとづくり協議会が発足した。平井地区の農事組合法人古座川ゆず平井の里（以下平井の里）の呼びかけに七地区の区長らが参集したものである。各地区の過疎化は深刻で、区単位の取り組みで



元商店の空き家に開いた七川ふるさとづくり協議会事務所と運営を担う地域おこし協力隊員

は衰退するばかりである、昔のように七川谷郷が一丸となって苦境を脱しよう、という主旨であった。

まず、資金を得るために和歌山県過疎対策事業をめざすこととし、事業を具体化するためには地域の現状と要求を把握する必要がある。そこで、平井の里や近年配置された地域おこし協力隊員などを中心に7地区の区長や住民への聞き取り調査を行い、課題や住民の思い、自分たちでできることの方角性の整理を行う

こととした。調査チームは平井の里理事、平井の里と長年のパートナーシップを形成している紀の川農協職員やインターンシップの和生、地域おこし協力隊員などで、約50軒を訪問し聞き取り調査を開始した。聞き取り後は沢山の本音や要望がまとまった調査データを分析し、その結果を住民や町と共有するために調査報告会を実施した。

これは、聞き取り調査、課題や思いの分析、報告会による課題と願いの共有化、取り組む方向の合意形成、そして皆で主体的な活動を創り出すという地域づくりに必要なプロセスを丁寧に踏んだものであった。

聞き取り調査からは、生活上のさまざまな不便に加え、「クマノザクラ」というキーワードが浮上した。2018年3月、紀伊半島南部に群生する野生のサクラが100年ぶりの新種であると森林総合研究所から発表され、クマノザクラと命名された。このニュースが七川の人々の心を動かし

たのである。
聞き取り調査から得られた課題と今後の方向性の概要は次のようなものであった。

1. 七川ダムを囲む約3000本の桜の名所が、桜の老朽化により魅力が低下しクマノザクラの育成を通じて新たな名所づくりをしよう。将来的にはサクラを活かした産業の創出。

2. 車の運転が困難な高齢者が増加し、買い物難民の増加↓買い物支援バスの試験運用と最適な運営方法の確立。

3. 人口減少、高齢化による地域力の低下↓若者移



調査報告会

住者を呼び込むための環境整備や情報発信。

超過疎の地域づくりの方向性には、生活上の不便や不備を解消する「暮らしの方向性」(上記2)、生業維持のための環境整備。後継者を調達、育成する「仕事の方向性」(上記3)、そして、後世につなぐ「希望の方向性」(上記1)がある。特に「希望の方向性」は、地域の疲弊の中で諦めの渦中にある住民に「ふるさと」という場の再確認を通してアイデンティティの再確立をすることで、その先に生まれる希望を次世代につなぐ方向性、といえる。そのわかりやすいキーワードが、クマノザクラであった。

豊かな生業を育んだ古座川の河畔に鮮やかに咲き誇るサクラは彼らのアイデンティティでもあった。故郷を誇る自尊の基盤であった。それが近年老朽化、倒木が目につき寂れてきた・・・。クマノザクラは、それに代わる新しい希望だった。住民が立ち上がった地域づく



平井地区では住民や学生をまきこんだ耕作放棄地再生活動も行っている

り運動は、財政難、人材難の中で、めざましい成果は困難かもしれない。しかし、野生のサクラを育て咲かせ、このサクラに地域存続の未来を託す。いつの日かクマノザクラは古座川河畔を彩ることだろう。

それはお年寄りたちにとって、自分の寿命の先も地域が続くという希望にちがいない。希望の取り戻しが、地域づくりの出発点だといえるのである。

今夏、街道の空き家を改装して七川ふるさとづくり協議会の事務所がオープンした。七川の地域づくり運動は、次世代に地域をつなぐという希望をもって、今始まったばかりである。